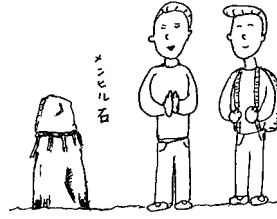


シリーズ

阿久比を歩く ⑫④



手前が「メンヒル石」奥が神明社拝殿

神明社南側から境内へ向かう参道が二つある。一つは石段、もう一つは「女坂」と呼ばれる緩やかな坂道の参道。両参道を上り切った接点に「メンヒル石」がある。
友人が石段、私は女坂から上り、「メンヒル石」を目指す。「息が合えば、同時に目的地点に着けるはずだと思っただけねえ・・・」
お互いが意識してか、二人がほぼ同時に目的の場所に着く。気が合い

石造物を巡る(植・大古根コース⑤)



ますね」と友人。もう五年、君といっしょに歩いているからね。一心同体だよ。「ちよつと気持ち悪いですな(笑)」。

四方を石柱で囲まれた中に「メンヒル石」がある。二人で持てば、なんとか運べるほどの大きさ。石の周りには、しめ縄が巻かれる。
メンヒルを事典で調べると、「ケルト語で『長い石』を意味し、先史時代の巨石記念物の一種」とある。事典でいうメンヒルとは少し異なる。
昭和初期に人類学者の鳥居竜蔵博士が神明社を調査した際、境内にある石物を「メンヒル」と呼んだことから、「メンヒル石」が俗称となった。
神の鎮座する場所を「盤座(いわくら)」といい、「メンヒル石」は、その盤座。古代のご神体といわれ、祭りの際、神が降りてくる霊石だとされる。
現在の神社には、拝殿が設けられ、参拝者は、その拝殿に向かい手を合わせているが、神の宿る盤座に手を合わせるのが本来の姿のようだ。

「昔は、口伝いで伝わってきた話も、高齢者が一人二人と亡くなっていくと、なかなか後世にまで伝わらない時代になってきたからなあ。あなたたちも頑張っているいろいろなことを調べてくれよ」と、帰り際に宿題をもらった。

「地区の社守をやっているときに、あなたが持っている『阿久比の石造物』でわしも、いろいろなことを勉強させてもらった。『メンヒル石』はそれを読み、知ったよ。わしの歳でも、知らないことばかりだから、若い人たちは何も知らないだろうな。神社下で出会った七十八歳の男性と会話する。
「地区の社守をやっているときに、あなたが持っている『阿久比の石造物』でわしも、いろいろなことを勉強させてもらった。『メンヒル石』はそれを読み、知ったよ。わしの歳でも、知らないことばかりだから、若い人たちは何も知らないだろうな。神社下で出会った七十八歳の男性と会話する。」



しめ縄が巻かれる「メンヒル石」